

成人前期女性のアイデンティティの研究

Research of the Identity of the Woman of Early Adulthood

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

須 長 恵 子

Keiko Sunaga

I. 問題と目的

昨今、女性の社会進出は進み、女性の働く場は広がった。また、経済の不況と少子高齢化により、女性の労働力自体が求められている。しかし、現実には、未だ家庭の仕事や子育ては、女性に期待されることが多いといえよう。

この中でも特に、成人前期の女性は、職業、家族、結婚、身体的変化、その他のあらゆる領域で、「それまでの自分では対処できない」というような体験をする可能性がある。この狭間の中で自分の生き方、あり方を模索することはストレスを抱えることでもある。

このような葛藤、ストレス過多の中での解決のプロセスは、主体的に選択する力である、アイデンティティの発達が重要な視点となる。

そこで筆者は、現代女性が、どのようにアイデンティティを形成しているのか、以下の2点について着目した。1点目は、現代の成人前期女性のアイデンティティ達成度と精神的健康との関連、2点目は、成人前期女性のアイデンティティ達成の程度と過程である。本研究では、以上の2点から、成人前期女性のメンタルヘルスに資することを目的とする。

1. 成人前期

成人前期とは青年期から成人期への、生涯発達における重要な移行期である。この時期は25歳から45歳くらいまでを指しており、人生の節目となる様々な変化を経験しやすい。具体的には、職業、パートナー、結婚、独身を通す、といった重要なライフスタイルの選択である。また、この時期はそれ以降の中年期の、「中年期危機」といった深刻な問題と向き合う準備の時期でもある。本研究では、この心理的にも社会的にも変化と影響が大きいとされる成人前期を、重要な時期として検討する。

2. 女性を取り巻く社会的背景の変化

女性を取り巻く社会的背景の変化として、少子高齢化、経済状況による雇用の変化、進学率の向上、婚姻の変化が挙げられる。このような変化は、男女ともに、多様な考え方、ライフスタイルを生んだ

といえる。その中でも、女性は「男は仕事、女は家庭」とされた時代から、現在への変化が男性に比べて大きいと考えられる。特に就職（常勤雇用か非常勤雇用など）・結婚・出産に関して選択に迫られることが多く、男性よりも女性の方が結果的に複雑で多様なライフスタイルとなりやすいといえよう。また、加えて、女性の社会進出が進みながらも、伝統的な考え方も残っており、その狭間の中に位置する事は、精神的な負担が大きいと考えられる。

3. アイデンティティについて

(1) アイデンティティとは

アイデンティティとは「自分は自分であって、他の誰でもない」という主体的な感覚を指す。これを提唱した Erikson, E.H. (1959) は、「＜身体を自由に動かせるようになること＞と＜文化的な意味＞が一致する事を通して、あるいは＜身体をきちんと動かせる喜び＞と＜社会的な承認＞が一致する事を通して、子供たちにより現実的な自尊感情をもたらす」と述べている。この「自尊感情」とは、「やがて成長し、手ごたえを持って実感される集団の未来に向かって自我が確実に学んでいる、という確信に変わる」、「社会的リアリティの中で明確な位置づけを持った自我に発達しつつある、という確信に変わる」としている。以上のような感覚を、「私は、自我アイデンティティ (ego identity) と呼びたいと思う」(Erikson, E.H., 1959) と述べている。これは、2つの自覚を意味する。1つは、「私は他の誰とも違う自分自身であり、私はひとりしかいない」という不変性の感覚である「斉一性」と、「今までの私もずっと私でありつづける」という感覚である「連続性」という事実の自覚である。もう1つは、自分らしいと感じられる自分（斉一性と連続性）が、他者・社会からも保障され、自分のあり方が他者からの期待や要請と一致しているという事実の自覚である。そしてこのアイデンティティの形成は「生涯にわたって発達する」とされる。

(2) 心理社会的発達論

ここでは、本研究のテーマ、アイデンティティについて Erikson, E.H. の心理社会的発達理論を述べる。この発達理論には2つの特徴がある。

1つ目は「心理・社会的」という観点である。Erikson, E.H. の理論では、人間を「身体・心理・社会的」存在と捉え、これを「心理・社会的」と述べた。

2つ目は、人間の生涯を、一つのサイクルとして捉えたことである。これは、人間を、生まれてから死ぬまでの生涯全般の展望に立って捉えるということである。そのサイクルは8つの段階があり、このような考えから、人間を「8つの発達段階」にわけた。これは「個体発達分化論」、また「ライフサイクル論」と呼ばれるようになった。

< 8つの発達段階について >

Erikson,E.H.は、各段階に発達の分岐点となるような心理社会的「危機（crisis）」を想定している。この「危機（crisis）」とは、社会的に生きていくための自我の力を想定し、マイナスの力とプラスの力が拮抗しあって働く心の中のバランスである。このバランスは山の峠のようなものである。山の向こうに進むのか、またこちらに戻るかの頂点のようなものである。これを「危機」として、「対」という概念を用いて、8つの発達課題を想定したものを表1に示す。

表 1. 個体発達分化の図式 (Erikson,E.H,1959)

	1	2	3	4	5	6	7	8
I 乳児期	基本的信頼 対 基本的不信							
II 幼児期初期		自律 対 恥、疑惑						
III 遊戯期			自主性 対 罪の意識					
IV 学齢期				勤 勉 対 劣等感				
V 青年期					アイデンティティ 対 アイデンティティ 拡散			
VI 若い成人期						親 密 対 孤 独		
VII 成人期							ジェネラティブ ティ(世代性) 対 停滞	
VIII 成熟期								インテグリティ 対 嫌悪、絶望

(3) 「アイデンティティステイタス面接」について

アイデンティティを扱った代表的な研究として、本研究で使用した Marcia,J.E.の「アイデンティティステイタス面接（自我同一性地位面接・Identity Status Interview）」がある。Marcia,J.E.以前の研究の多くは、アイデンティティが達成された時に示される特徴（自己概念の安定性、適応や健康）を測定し、アイデンティティの程度を決定しようとした(Rasmussen,1964 など)。しかし、Marcia,J.E.は、これらはアイデンティティの達成の程度が不明瞭であると考え、「ある青年がメソジストであり、共和党の農夫である父親と同じように、ほとんど何も疑問を感じることなく、メソジストの共和党の農夫になっているならば、この青年は、はたして、本当に同一性（アイデンティティ）を達成していると言えるであろうか」（Marcia,J.E,1966）と疑問を述べている。そして、この疑問を研究の基盤とし、「心理・社会的基準」として Erikson,E.H.の記述の中から以下の2点を取り上げた。

①「危機」(crisis)の有無。

これは、役割の試みと意思決定期間を指す。なお、ここで使われる危機(crisis)という用語は、ある個人の発達における「重大な転機点、わかれめ」を意味するものであり、危険を意味するものではない。

②「傾倒」(commitment)の有無。

自己定義を実現し自己を確認するための、独自の目標や対象への努力の取り組みの積極的な姿勢の有無。

Marcia,J.E.はこの2基準によって、表2のような4つの「アイデンティティステイタス(自我同一性地位)」を設定した。そして、これを測定するため、アイデンティティステイタス面接(Identity Status Interview)を考案した。これは、職業、宗教、政治の3つの領域について行われ、およそ20の質問項目からなる。そして、これらの3領域の各々について被面接者は、最も対応したステイタスに評定される。その後、これらを総合して、その被面接者を最も代表していると考えられるステイタスを、全体的なアイデンティティステイタスとして判定する。

表 2. アイデンティティ・ステイタス(自我同一性地位)

アイデンティティステイタス	危機 crisis	傾倒 commitment	概略	略称
①アイデンティティ達成 (Identity Achievement)	経験した	している	幼児期からの在り方について確信がなくなりいくつかの可能性について本気で考えた末、自分自身の解決に達し、それに基づいて行動している。	A 群
②モラトリアム (Moratorium)	その最中	しようと している	いくつかの選択肢について迷っているところで、その不確かさを克服しようと一生懸命努力している。	M 群
③早期完了 (Foreclosure)	経験していない	している	自分の目標と親の目標の間に不協和がない。どんな体験も、幼児期以来の信念を増強するだけになっている。	F 群
④アイデンティティ拡散 (Identity Diffusion)	経験していない	していない	危機前(pre-crisis)：今まで本当に何者かであった経験がないので、何者かである自分を創造すること不可能。	D 群
	経験した	していない	危機後(post-crisis)：全てのことが可能だし可能なままにしておかなければならない。	

(4) アイデンティティにおける「関係性」の視点

近年アイデンティティ研究において注目されている「関係性」の視点について述べる。初期のアイデンティティ研究では、Erikson,E.H.や、Marcia,J.E.に代表されるように、個としての発達を中心に研究が進められてきた。これらの研究の多くは、男性を対象として自己の確立や、他者からの分離を発達の最優先課題としてきた。しかし、Erikson,E.H. (1950) がアイデンティティ論を提唱してから半世紀が過ぎた。近年、人間のライフサイクルの変化や、価値観の多様化に伴い、従来の人間的発達観のみでなく、人とのつながりや相互協調性、配慮や、ケアという関係性から、心の発達をとらえようとする発達観が注目されている。

4. 本研究の目的と仮説

先に述べたように、Erikson,E.H.が、アイデンティティの概念を提唱してから半世紀が経った。また、社会は大きく変化し、複雑化も増しているが、近年、成人のアイデンティティについての実証的研究は乏しい。そこで筆者は、現代成人前期女性のアイデンティティに関して、それを達成している者は、していない者より精神的に健康かという主題について検討をしたいと考えた。筆者としては、アイデンティティを達成している成人前期の女性は、そうでない女性よりも精神的に健康であろうと推測をしており、本論文ではこの点を検証する。さらに、アイデンティティの達成度の高い者への面接調査を通して、現代の成人前期女性はこれまで、あるいは現在、どのような「危機」に遭遇し、それにどう取り組んできたのか、または取り組んでいるのかなどを明確にしたい。具体的には、アイデンティティ達成度の高い者は、人生の様々な選択に対して自己決定することができ、その決定の責任を持つ主体性があると考え。また、自己受容・他者受容ができるため自己評価も高い、そして親密な人間関係を形成しやすく、安定した対人関係を維持することができると考える。以上の考えから、次の仮説を立てた。

仮説：アイデンティティ達成度の高い者が、低い者より適応的で精神的に健康である。

Ⅱ. 研究Ⅰ：質問紙調査

1. 方法

(1) 調査対象者

成人前期にあたる25歳から45歳女性に、本学通信教育の授業や、知人を通して調査協力を募った。回答数は160名、有効回答数は151名、有効回答率は94.3%であった。

(2) 調査時期

2014年6月～11月

(3) 調査手続き

教科担当教員の許可を得て、通信教育のスクーリングの授業時間の一部を使い質問紙への回答を求めた。質問紙の説明、同意書の記入含め20分ほどで実施された。

(4) 質問紙の構成

質問紙A：アイデンティティ達成度の高い者と、アイデンティティ達成度の低い者にわたるため実施した。

質問紙A：多次元性自我同一性尺度 MEIS 全20項目（谷,2001）

自我同一性（アイデンティティ）を測定する尺度である。本尺度は Erikson, E.H. の記述を基に、自我同一性の感覚を4つの次元「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「心理社会的同一性」と仮定した。「過去において自分をなくしてしまったように感じる」等の項目に対して7段階評定で求める。

質問紙B～D：アイデンティティ達成度の高い者と、低い者の精神的健康度を比較調査する。

質問紙B：自尊感情尺度全10項目（山本・松井・山成,1982）

自尊感情を測定する尺度である。本尺度はローゼンバークが作成した尺度の山本ら（1982）による邦訳版である。「少なくとも人並みには、価値ある人間である」等の項目に対して、5段階評定で求める。

質問紙C：自己評価式抑うつ性尺度 SDS 全20項目（福田・小林,1973）

うつ状態の程度を測定する尺度で、Zung（1965）が開発した日本語版である。本尺度は、精神的適応度を測定する尺度として先行研究で多く使用されている。「食欲はふつうだ」等の項目に対して、4段階評定で求める。

質問紙D：親密性尺度全10項目（谷・原田,2011）

親密性を測定する尺度である。親密性とは、Erikson, E.H. が人間の心理社会的発達を8つの段階に分けた、第VI段階の発達課題である。「親しい人という時に、お互い満足しあえる関係にある」等の項目に対して7段階評定で求める。

面接協力者の募集

質問紙調査の結果を踏まえて、後に面接調査を行うため協力者を募った。面接調査に協力が可能で

ある場合のみ、氏名とアドレスの記入を求めた。面接は 30 分～1 時間程で行われ、個人が特定される記載はされない事を示した。

2. 結果ならびに考察

(1) 信頼性の検討

まず、尺度の信頼性を検討するため Cronback の α 係数を算出した。その結果、多次元性自我同一性尺度(MEIS)、 $\alpha = .943$ 、自尊感情尺度、 $\alpha = .856$ 、親密性尺度、 $\alpha = .865$ であった。以上より信頼性は十分な値であった。自己評価式抑うつ性尺度 (SDS) は、 $\alpha = .696$ と低い数値であった。しかし、本尺度が多くの先行研究で使用されていることから、分析を続ける事とした。

(2) 研究 I の結果と考察

仮説を検討するため、以下のように群分けした。自我同一性尺度の得点において、上位 25% (117 点以上) をアイデンティティ高群、下位 25% (85 点以下) をアイデンティティ低群とした。高群 43 名、低群 40 名となった。

アイデンティティ高群、低群について、自尊感情尺度、抑うつ性尺度、親密性尺度に関する得点を算出し、平均値の差の検定を行った。その結果、自尊感情尺度の得点において、0.1%水準で有意差がみられた ($t = 10.07$ 、 $df = 81$ 、 $p < .001$)。抑うつ性尺度の得点において、0.1%水準で有意差がみられた。($t = 8.71$ 、 $df = 81$ 、 $p < .001$)。親密性尺度の得点において、0.1%水準で有意差がみられた。($t = 9.23$ 、 $df = 63.10$ 、 $p < .001$)。従って、アイデンティティ高群は、低群に比べ、自尊感情尺度得点が高い、抑うつ性尺度得点が高い、親密性尺度得点が高い、という結果が得られた。(表 3)

以上より、筆者の仮説は総体的に支持されたといえよう。しかし、質問紙調査の限界として、アイデンティティ得点が高いということのみでは、現実の、就職、結婚などの選択の時に、どのようにそれらの事柄に取り組んだか、明らかにすることはできない。そこで、研究 II では、アイデンティティ・ステイタス面接 (Marcia, J. E. 1976) を実施し、上記の問題をより詳しく検討することとした。

表 3. 高群・低群の各尺度の統計結果

	高群 n = 43		低群 n = 40		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自尊感情	40.20	5.52	25.67	7.53	10.07***
抑うつ性	33.79	7.59	47.05	6.12	8.71***
親密性	61.55	6.35	43.75	10.54	9.23***

*** $p < .001$

Ⅲ. 研究Ⅱ：面接調査

1. 目的

①成人前期女性のアイデンティティ達成度の高い者が、これまでどのようにアイデンティティを形成してきたのか、現在の危機はどのようなものか、その危機にどのように取り組んでいるか等、その特質について考察する。

②質問紙 A：多次元性自我同一性尺度の結果、「アイデンティティ得点が高い」者が、アイデンティティステイタス面接（自我同一性地位面接）においても、「アイデンティティ達成」地位になるか、その検討を通じて、多次元性自我同一性尺度の信頼性を確かめる。

2. 方法

（1）調査協力者

研究Ⅰのデータを元に、アイデンティティ得点が高い者の内、協力が得られた者 10 名に対し、半構造化面接を実施した。面接の詳細を記述するために、被面接者の了承を得て、レコーダーに録音し逐語録を作成した。面接時間は 35 分～1 時間半程度であった。

（2）調査時期

2014 年 9 月～11 月

（3）分析方法

<質問項目>

「アイデンティティ・ステイタス面接（自我同一性地位面接）」（Marcia, J.E.1976）を参考に、質問項目を作成した。

<評定>

評定は、園田（1980）の評定マニュアルを参考に行った。

3. 結果ならびに考察

（1）信頼性の検討方法

本面接の評定に際しては、アイデンティティステイタス面接に詳しい者 1 名を副評定者に、筆者の面接の逐語記録をもとにステイタスの評定を依頼した。筆者を含めた 2 名のステイタス評定の一致率の検討から、この信頼性を測る。評定者間の一致率の求め方は園田（1980）を参考とした。

(2) 信頼性の結果

全面接者 10 名の中から 4 名を抽出し、評定者間の一致率を検討した（表 4）。

表 4. 各領域の一致率

領域	職業	価値観	全体
一致率	75% (3/4)	100% (4/4)	100% (4/4)

全 12 項目中 11 項目が一致した（一致率は 91%）。先行研究、Marcia ら（1966）の方法では、一致率が 70～93%、園田（1980）の方法では 66.7～90%に位置しており、それらの数値と比較して、今回の結果には一応の信頼性はあるとした。

(3) 分析結果

＜アイデンティティ・ステイタス＞

被面接者 10 名のアイデンティティ・ステイタスを表 5,6 に記載する。なお、全体的ステイタスは、「アイデンティティ達成：A」が 2 名、「早期完了：F」が 8 名であった。

表 5. 各達成地位の人数

地位	A	F	M	D
職業領域	4	6	0	0
価値観領域	2	8	0	0
全体的ステイタス	2	8	0	0

表6. 被面接者10名の3領域のアイデンティティ・ステイタス

	職業領域			価値領域			ステイタス 全体的
	危機	傾倒	地位	危機	傾倒	地位	
①	1: 危機がなかった	4: はっきりと傾倒している	F	1: 危機がなかった	3: ほぼ傾倒している	F	F
②	3: 危機があった	4: はっきりと傾倒している	A	1: 危機がなかった	4: はっきりと傾倒している	F	F
③	1: 危機がなかった	4: はっきりと傾倒している	F	1: 危機がなかった	3: ほぼ傾倒している	F	F
④	2: あまり危機がなかった	3: ほぼ傾倒している	F (A)	1: 危機がなかった	4: はっきりと傾倒している	F	F
⑤	2: あまり危機がなかった	4: はっきりと傾倒している	F	1: 危機がなかった	3: ほぼ傾倒している	F	F
⑥	3: 危機があった	4: はっきりと傾倒している	A	3: 危機があった。	4: はっきりと傾倒している	A (F)	A
⑦	3: 危機があった	4: はっきりと傾倒している	A	3: 危機があった	4: はっきりと傾倒している	A (F)	A
⑧	2: あまり危機がなかった	3: ほぼ傾倒している	F	2: あまり危機がなかった	3: ほぼ傾倒している	F	F
⑨	3: 危機があった	4: はっきりと傾倒している	A	2: あまり危機がなかった	4: はっきりと傾倒している	F	F (A)
⑩	2: あまり危機がなかった	3: ほぼ傾倒している	F	1: 危機がなかった	4: はっきりと傾倒している	F	F
合計	1 なかった (2名) 2 あまりなかった (4名) 3 あった (4名)	3 ほぼしている (3名) 4 はっきりしている (7名)	A (4名) F (6名)	1 なかった (6名) 2 あまりなかった (2名) 3 あった (2名)	3 ほぼしている (4名) 4 はっきりしている (6名)	A (2名) F (8名)	A (2名) F (8名)

以下、上記においてA群と評定された⑥さん、⑦さんの評定の根拠となる概要を、表7,8に示す。

※表7,8における職業①～⑦、価値観①～⑧の詳細は評定(園田、1980)を参考

※下線：逐語より抜粋

表 7. ⑥さん

領域	職業	価値観	全体的地位
地位	A	A (F)	A
危機	3：危機があった	1：危機がなかった	・職業 小学校の頃から保育士を目指し、大学時代にも実際に資格取得のために講座受講などの具体的行動を起こしている。先輩の影響で、現在の職業について真剣に考え、本人なりに突き詰めて考え決定している。容易に変更する事を嫌がり、最終選択にしたものが親の影響のあるものであるが、危機を経験し（価値観と重なる職業の為に常に悩んでいた、反対された等）、自分で決定したように見える。
要約	①ある。「時間」をかけた。ゴールは就活の筆記試験でし た。前日に固まりました。自分はこの道でいくんだと。」 ②考慮した。小学5、6年生の時から保育士を目指していた。 大学時代資格取得のために講座受講。就職活動時の自己分析の結果、何のために仕事をするか等考え「突き詰めた」、その結果現在の職を選んだ。 ・模索した。「就職活動中に自己分析するじゃないですか、それで、何のために自分は仕事をするんだとか、何のためかを徹底的に突き詰めました。」 ③あった 就職活動中に悩んで決めた。 ④している「自分の道を貫いていたと思う。」	①ある 信仰 ②はつきりとはない「周りの方の方の今までの自分にしてくれた関わりが大きい」「色んな人の姿に触れて、自分もそうなりたいたいと小さい頃から積み重なってじんわりと、＜略＞悩みを乗り越えていく姿とか、人のために尽くしている姿とか」③ある「常に悩んできた。「 <u>「悩んで相談にのつてもらったり、もの事をそこまて知らないんじゃないかと思っ、書物を読み」「自分なりに考えて、すつきりするまで考え抜きました。」</u> 「固まりました。自分はこの道でいくんだと」「その時にやれる事をしたかなと思います、それで心が決まりました④ある。人生の師と思う人がいる。⑤それなりにしている。信仰について、自分なりに突き詰めて考え、両親以外の人物の影響もありこの道だと決めている。	・価値観「自分は知らないだけなんじゃないか」と、書物を読む、人に相談する、価値観と職業が一致するために、他職種も真剣に考慮、行動を起こしている、決まらなければ現在の職業の就職試験を受けなかったと明言している。自分自身の価値観を明確に表現している。
傾倒	4：はつきりと傾倒している	4：はつきりと傾倒している	・全体的 概して成功することができると思われる。対人的傾向、親密な人間関係（理解・応援）がある。
要約	⑤できる。「今の自分があるのは、なぜかと考えると、周りの人たちののおかげなので、恩返ししたい」「社会貢献したい」「今の所で自分の力が発揮できるかなと思ひ、今まで応援してくれて、関わってくれた人に恩返しするために決めた。」⑥魅力・必要なものがわかり努力している。「自分の役割だと思ひ。充実感があります、忙しいけど満足」「会社に貢献できるようなりたい」「先輩のアドバイザーや育成、新しい業務も増えてチャレンジすることがたくさんある」⑦嫌だと思ひ「一日でも長く、今の環境でもっとよりよい仕事をやりたい、辞めたくない。」	⑥できる。信仰 ⑦ない。就職活動の時に「突き詰めて」考え、この道だと決めた。現在もそれが強化されているため、「（この仕事について）自分の役割だと思ひ。充実感があります、忙しいけど満足しています。」また、「（仕事、価値観が変わる事は）ないです。とても悩んで考えて動いて決めたので、容易に変わることはないように見える。」 ⑧ある。同じ価値観を持っている友人だけでなく、違う価値観の友人とも積極的に話すことがある。	

表 8. ⑦さん

領域	職業	価値観	全体的地位
地位	A	A (F)	A
危機	3: 危機があった	3: 危機があった	職業 中学校時から報道関係の仕事 を希望。一度目の就職で挫折、次の 就職で希望職種に就く。仕事に対し 満足感と充実感を持つ。しかし、自 身の仕事への適性、体力的に今後続 けられるか等考え（成人期の危機）、 転職活動を行う。とある取材がきつ かので、報道の仕事を辞め、海外経 験を生かして教員を目指す決断をす る。教員になる事を変更する予定は ない。2 度の危機を経験して自分で 決定したように見える。 価値観 7 さん曰く「日本的な価値観」 である、「仕事ベース」、「女は結婚す るもの。」という考えに疑問を持って きた。その中で、自身の特別の価値を 「勇気と実行力」「仕事ベースではな い」生き方等、明確に表現する事がで きる。諸価値の重要性、優先性を明確 に位置付ける事ができる。 全体的 概して「成功する」事がで きる様に思われる。環境の急激な変 化や、責任の予想外の重荷に圧倒さ れるようにみえない。対人的傾倒は 信頼できる同性の友人。結婚は考慮 しない。
要約・逐語	①ある。「仕事自体大好きだったけれども、続けていくのかどうかと色々迷いがあって、その将来の事について色々考えていた時」に、偶々そいういう取材に行つて学びたいけど学べなかった人達がいて、それを初めて知って、それで一将来的に人の役に立っていく時に教員？私は元々大学が欧米だったから、英語を教える教員になろうと思うって②考慮した。意味を模索してきた。・TV 局の仕事が続けるかどうか考へた。結果、転職した。・学びたいけど学べなかった人達がいて、立っていく時に教員・海外の経験から、子供達に世界に出て、日本的な価値観だけでなく様々な価値観を知って欲しいと思った。③あった。・体力的なしんどさ、プロとしての適正があるかないかの疑問。克服：転職。⇒自分で考えて、行動して、紙に書きだしたりして現在の教師を目指す事を決断。「覚悟をきめて教員になろうと」決めた。④している・不仲な時期もあった。今は理解してくれ、「信頼してくれてる。」・「親からは反対されなかった、応援してくれてた。だからできた。感謝している。」	①ある。「去年欧州で過ごした時に、ぼちっと自分はどう生きているんだと見えたんだよね。」・「なんか私は仕事は一生懸命する、誰よりも一生懸命するってのはある、でもそれがベースではないなというのがはつきり見えた。」・「最終的には、人生の中で大切なものは勇気と行動力」②ある。・「教会に目が照っていて、その光景がなんとも美しくて、写真なんかでは収められない。その時にたった1年間仕事しない事で、この景色を見ずして死ぬ事の方がもったいないと思つたのよね、私ね、そういう事が一杯あったのね、世界を見ずにして、死ぬなんてもったいないと思つたんだよね、仕事を大切に思う所は自分の中で低いかも。自分が他のもつと違う所を見て生きていきたい」③ない。・「迷う事はねー迷わないんだよね」④ある。・サッカー選手 H の有言実行する所。⑤している。現在親は応援してくれるが、結婚出産に関しては母親の思いとは違う。でも「教員で子供に還元していいからと思うのよ」「自分の目がそこに向かない限りはへいくら言われてもねー」	⑥できる。・勇気と行動力。「仕事ベースでなく世界を見たい。」⑦ない。・「ないね、あの時ばしつと分かつて、そこいろいろなものがついてくることはあるけど、そこが崩れることはないよね。」⑧ある。・自分らしく話せない友人もいるが、話せる友人もいる。
傾倒	4: はつきりと傾倒している	4: はつきりと傾倒している	
要約・逐語	⑤できる。教師、内容は②と同じ。⑥分かっており努力している。・教員免許取得のために勉強している。・経済的には必要はないが、実践できるので教育関係のアルバイトをしている。⑦思う。他のという気はない。・「日本の子供達に、自国の国の人に、自分が今まで学んできた事を、還元したい思いがある、それができるのは教員」		

成人前期女性のアイデンティティの研究

次に、面接目的①を検討するために、危機を経験した被面接者のアイデンティティ形成を、「青年期」、「成人前期」に整理したものを以下に示す。なお、危機を経験した被面接者とは、全体的ステイタスがA群であった⑥さん、⑦さん2名（表6、7、8）と、職業領域のみステイタスがA群であった（全体的ステイタスはF群）、②さん、⑨さん2名（表6）の合計4名である。

<青年期>

青年期のアイデンティティ形成の危機、危機の契機・取り組みはどのようなものか。

<成人前期>（青年期のアイデンティティ形成後）

成人前期のアイデンティティ形成の危機、危機の契機・取り組みはどのようなものか。

なお、⑥さん、⑦さん、に関しては、表7.8に概要を示したため省略する。

②さん 職業領域

<青年期>

②さんは、青年期に「危機」を経験しなかった。彼女は、子供の頃から行っているスポーツに大学時代まで全力で取り組み、結果も残した。その継続として、青年期の職業選択は、「(スポーツ)をやりたいくて、やれる仕事をやろうと思った。3年で辞めて専門職になろうと思っていた」そのため、職種に関してはスポーツが継続できること以外考慮しなかった。このころ、スポーツをやめた後は、子供の頃から希望していた、専門職に就く予定であった。この専門職の資格は大学時代に取得した。このように、子供のころからの希望に周囲との違和感がなく、はつきりと傾倒している。

<成人前期>

②さんは、子供のころから行っていたスポーツをやめようかどうか迷ったことが「危機」となった。また「体力の限界」も感じていた。「やめたら何が残るんだろうと思って、すごく悩みました」と、自分と真剣に向き合う機会となった。

この危機に対する取り組みは、「信頼できる人に相談する」自分で「考えきる」「思い切りやる」というものだった。その中で、スポーツをやめる決断をし、新しい生き方として、「この会社の仕事を知れば知る程、死ぬまでやりたいと思うようになった」と、この会社に継続勤務する決断をした。そして、「自分の生き方が明確になりました」と、危機を経て明確になった自己を実感している。

その後現在は、「(会社の)方針が本当によくて。元々、教育に携わろうと思っていたんで。この会社は、教育の貢献という理念があって」、「方針を聞いたときは、体に電撃が走りました」と、現在の会社で働くことに、別の分野である「教育への貢献」という価値づけをしているようである。また、

「仕事の最初の頃は、接客が恥ずかしくて、すごく悩んでいた。(中略)でも、自分の心が強くなりました。仕事に慣れてきて、一人一人のことを思えるようになりました。」と仕事を通して自己の成長を感じているようである。また、「(他の仕事に変えてもいいと思うか、という質問に対して) ないです。自分の役割が果たせる仕事はこれだと思う」と、述べており、現在の仕事に強く傾倒しているようである。

今後の展望については、80代まで考えている。具体的な直近の展望は、「今後、経営者というか、店長になりたいと思っています。だから今はいろいろなことを学んで、吸収する時期です」、「展望は死ぬまで考えています。この仕事を定年までやりたいですね。定年後も、周りの方々に恩返ししていきたいですね」と述べている。

⑨さん 職業領域

<青年期>

⑨さんは、青年期にあまり「危機」を経験しなかった。大学時代の就職活動の際、希望の会社から不採用となった。これにより、「そういえば、私、(希望職種) になりたかったなと思いました」、その希望職種の志望理由は、「楽しいから」と漠然としたものである。また、「大学入ってから進路決めようと思っていたので」、「(クラブ活動) に打ち込んだ3年間だったので、思い出したのが4年生の時で」と述べている。不安を抱くことはあったようだが、「危機」があったとはいえない。「業種にこだわりはなくて、(希望職種) になりたくて、繋がる物ないかなと思ったんですけど、そんな直結する事もないので」と、働きながら希望職種を目指すことが可能であった事もあり、折り合いをつけ、希望職種とは異なる企業に就職した。

<成人前期>

⑨さんは、かつて不採用にされた会社から採用の誘いを受けた。これが危機の契機となった。「あり得ないと思って、自分は企業で信頼してもらって働いていたし、(希望職種) には固執してて」、「それで本当に自分と向き合いました」と述べている。

この危機に対する取り組みとしては、「そもそも(希望職種) に(何故) になりたいんだろう」と、希望職種の志望理由を吟味する機会となった。これは青年期には行われなかったことである。また「なんでなりたんだろう思った時に、有名になりたいとか、自己実現なんですかね。本当の目的ではないというか、自分がやりたことだけでは、自己満というか」という思いに至った。自己実現を否定するつもりはないが、「向き合っていく中で、自分が本当にやりたいことは、(希望職種) という道じゃなくてもいい、できると気づきました」、「自分の能力が生かせると思って」と、転職を決めた。

そして現在、仕事に対し、「楽しい、達成感が得られる。こんな仕事できて、ありがたいなって」、「心のやりとりというか、そこが魅力ですね、普通にこなすこともできる、でも一つ一つ、丁寧にもで

きる。(前職)は仕事を割り切ってやっていたましたね、お客さんは大事にしますけど、売り上げ目標がありますから、今はどうやったら一人一人を大事にできるか、自分も悩みながら」、「なんとかして、思いを汲みたい、真心を、大事にしながら」と述べており、仕事に魅力と充実感を感じているようである。また、今後現在の仕事について、「(他の仕事に変えてもいいと思うか?) 思わないですね、理念とか、業務内容が自分にとって一番いいと思うから」と、述べており、現在の仕事に強く傾倒しているようである。

今後の展望については、80代まで考えている。具体的な直近の展望は、「家庭を持って子育てして、地域の活動をして」、と述べている。

(4) 研究Ⅱの考察

<考察1 面接目的①について>

ここでは、面接目的①について検討した筆者の見解を、<これまでどのようにアイデンティティを形成してきたのか>、<現在の危機はどのようなものか>、<どのように取り組んできたか>、<その特質について>の、4つの観点から述べる。

まず、1つ目<これまでどのようにアイデンティティを形成してきたのか>について、2点述べる。

1点目、青年期に危機を経験した⑥さんは、青年期に、就職活動と重要な他者との葛藤が契機となり危機を経験し、それまでの価値観、職業観を再吟味した。その後成人前期に危機を経験することなく、アイデンティティは強化されているようである。

2点目、成人前期に危機を経験した②さん、⑦さん、⑨さんは、青年期は、周囲からの影響で形成してきた職業、価値観を持ち続けていた。その後成人前期に、生き方への模索等が契機となり危機を経験していた。これによりそれまでの価値観、職業観を再吟味した。

2つ目、<現在の危機はどのようなものか>について述べる。

現在の危機は、特に語られなかった。しかし、今後の展望では、「結婚」について語られていた。今後、自分の希望する展望と、現実の間で「危機」を経験する可能性が示唆された。

3つ目、<どのように取り組んできたのか>について2点述べる。

1点目、決断する事を決めるという取り組みである(②さん、⑥さん、⑨さん)。2点目、疑問や違和感を保ち続けるという取り組みである(⑦さん)。

4つ目、<その特質について>について5点述べる。

①社会化、②成熟・世代性、③満足感・自己肯定感の高さ、④自己決断した職業、価値観に対する確信の強さ、⑤時間的展望の長さ。

以上、この5点の共通項はいずれも、「危機」を体験することにより、アイデンティティは強化、成熟することを示唆した。

今回の質問紙調査において、アイデンティティ・ステータスをみると8名がF群と評定された。筆

者は、質問紙調査の得点上アイデンティティの高い者から、面接者を募った。従って、面接における全体的ステイタスにおいても、大多数の者がA群になると予想していた。しかし、面接の結果としては、A群2名、F群8名であり、F群が大多数であった。この質問紙上の得点と、面接結果が異なった要因は何か、面接の目的②である「質問紙の信頼性の検討」と関連するものであるため、次に<考察2>として、この点を独立して取り上げることとする。

<考察2 面接目的②について>

次に、面接調査目的②について検討する。考察1で述べたように予想と異なった要因として4点述べる。1点目、質問紙の限界である。2点目、被面接者の特質である。3点目、関係性の視点である。4点目、社会的背景の変化である。

以上より、現代では「危機」は起こりづらいこと、「危機」を体験することなく、ある程度、確かなアイデンティティの形成が可性である事が示唆された。では現代において、A群とF群の違いである「危機」の有無はアイデンティティ形成にどのような意味をもたらすのか。この点に関してA群とF群を比較した。その結果、両群の共通項として、満足度の高さや重要な他者との良好な関係が示された。一方、異なる点として、A群の方がF群よりも、自己決定の確信が強く、時間展望が現実的で長い事が示唆された。この結果を考察すると、「危機」を経ることでアイデンティティは強化され、現実的になる事が示唆された。

V. 総合考察

1. 総合考察

ここでは、本調査を通じて筆者がもっとも興味関心を抱いた論点に絞る。それは、「現代の成人女性のアイデンティティの発達において、「危機」は必要なのか、それともあまり必要ではないのか」という点である。

今回、研究Ⅰの質問紙調査の結果では、明らかにアイデンティティ得点が高得点群の方が、低得点群よりも適応的で精神的に健康であることが示された。しかし、アイデンティティステイタスを評定するための研究Ⅱの面接調査では、その高得点群10名の中で、全体的ステイタスがA群と評定された者はわずか2名であった。そして、残り8名は、全体的ステイタスはF群と評定された。このことから、「現代の成人前期女性のアイデンティティ形成において、自分の選択に関し「傾倒」していることは重要であるが、一方で、「危機」を経ることはあまり重要ではないのか」との問題が提起されると考えられる。

この要因について筆者の見解を述べるならば、まず、Erikson, E.H. (1959) がアイデンティティを提唱した時代と、現代社会が大きく変容したことが挙げられる。特に成人女性の生き方として、仕事を持つこと、キャリアを積むことなどに関し、今は大きな危機を経なくても比較的容易に選択したり

行動したりすることが可能な時代である。また、その女性の選択に対して、周囲からの肯定的な受容や支持が得られる可能性も高い。これは Erikson, E.H. (1959) の提唱するアイデンティティの「(斉一性と連続性) が、他者・社会からも保障され、自分のあり方と他者からの期待や要請が一致しているという事実の自覚」を持ちやすい事を示唆していると考えられる。このことが、現代の成人女性のアイデンティティ形成において、「危機」を経験する事がなくても、ある程度、確かなアイデンティティ形成が可能となりうるのではないかと筆者は考察した。

しかし、そうであるなら、「危機」は不要なのか、「傾倒」さえしていれば現代女性のアイデンティティ形成は良いのかとなると、筆者はそうは考えない。今回の被面接者のA群とF群の両群間には、「確信」の有無、ならびにアイデンティティの強さの程度の違いが示唆された。これが、今後、中年期さらには老年期に向けて、各人の人生にどのような影響を与えるのか、本研究では明らかにすることはできない。しかし、面接を通じて筆者は、F群にはないA群の確かさといったもの、例えば確信の強さ等を感じた。

これについて被面接者たちが語る「危機」の内容を総括すると、現代成人前期における「危機」とは、人生に意味を見出す作業としての意義があるのではないかと筆者は考える。この作業とは、まず、人生の意味、自分の存在の意味、働く事の意味、自分の生きる意味を明らかにすることである。これにより、人生の目的、自分の存在目的を自覚する。そこに、目標、充実、満足感が生じるのではないかと考えた。以上のように、この意味を見出す作業に成功することにより、人生の目的が明確となり、人生に価値が付加されるように感じられた。

以上より、人生に価値を付加する事が、現代における「危機」の意義であると考えられる。また、違った観点からひとつ提示すると、その後の中年期は、身体の不調や社会的役割の変化や終焉など、一般に、多くの危機に見舞われやすい時期である。その前の成人前期のこの時期に、自己を探索する「危機」という作業を行う事は、今後の人生の生涯発達において意義深いのではないとも言えよう。

本研究の被面接者の人数は少なく、特徴的であるため、そこから断定的なことは言えないが、筆者は、成人前期に危機を経てアイデンティティを形成する事は、人間が真に充実と精神的健康を持つ生き方を行う可能性が高まると提言したい。これは女性に限った事ではない。しかし、特に、激しい社会的変化の過渡期の中で、多数の複雑な役割を求められるという特有の性質が女性にあると筆者は考える。このような女性が、今後、中年期へと発達が移行する過程で、その複雑さ、多様さ、難しさは、男性よりも増していくのではないかと考えられる。その時に、現代の女性達が、真に充実と精神的健康を持つ生き方をするのに、成人前期のアイデンティティの達成が重要である、と筆者は考える。

2. 今後の課題ならびに展望

まず、本研究には調査対象者の課題がある。本研究の調査対象者は、本学の通信教育の学生、筆者の友人、知人より協力者を募った。そのため、サンプルに偏りがあったことは否めない。そのため、

本研究の結果を一般化することは困難である。従って本研究における面接結果は、現代の成人前期女性のアイデンティティの特質についての示唆にとどめる必要がある。そのため、今後も調査を行い、より一般化した、適したデータを得る必要がある。

次に、面接調査のサンプル数の少なさである。本研究における面接協力者は10名であった。本研究では、面接結果をまとめ、特質を抽出、比較することで、現代成人期女性のアイデンティティ達成度の高い者の形成過程、程度、特質を検討した。しかし、少なさゆえ、この特徴を一般化することは困難である。従って、本研究における面接結果は、現代の成人前期女性のアイデンティティの特質についての示唆にとどめる必要がある。今後より多くの面接調査からの検討が望まれる。

最後に、本研究の面接調査の結果、価値観領域で「危機」を経験した者は、全体的ステータスにおいてA群と評定された2名であった、その契機となったのが、「重要な他者」との「関係性」における葛藤であった。一方、他の8名は上記の葛藤を経験していなかった。この価値観領域における「重要な他者」との「関係性」という視点で、アイデンティティ形成についての検討をすることにより、現代成人前期女性のアイデンティティの特質が、より明確になるのではないかと考える。以上のことを今後の展望の1つに位置付けたい。

謝辞

本研究論文を作成するに当たり、本学大学院 指導教授の園田雅代先生に、多大なご尽力を賜りました。心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 安藤智子 2009 気分障害の理解と援助 無藤隆・池上知子・福丸 由佳・森敏昭(編集) 2009 よくわかる心理学 ミネルヴァ書房 pp.318-319
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. 仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 I・II みすず書房
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*, International Universities Press. 西平直訳 2011 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- Erikson, E. H. 1964 *Insight and responsibility*, Norton. 鐘幹八郎訳 1971 洞察と責任——精神分析の臨床と倫理、誠信書房
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌 75, 673-679.
- Josselson, R. L. 1973 Psychodynamic aspects of identityformation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31(4), 292-302.
- Levinson, D. J. 1978 *The Seasons of Man's Life*. New York: Alfred A. Knopf, Co. 南博訳 1980 人

生の四季中年をいかに生きる力 講談社

Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality, and Social Psychology*. 3, 5, 551-558.

Marcia, J.E. 1976 Identity six year after: A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, 5, 145-160.

松下美知子・岡本祐子 2002 新女性のためのライフサイクル心理学 福村出版 pp.126-133.

宮下一博 1987 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 日本教育心理学会 35(3), 253-258.

無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究 27(3), 178-187.

二宮克己・大野木裕明 2006 生涯発達心理学 ナカニシヤ出版

岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 295-306.

岡本祐子 1986 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析 教育心理学研究 34(4) 352-358.

岡本祐子 1999 女性の生涯発達とアイデンティティー個としての発達・かかわりの中での成熟 北大路書房

岡本祐子 2002 中年のアイデンティティ危機をキャリア発達に生かす--個としての自分・かかわりの中での自分 *Finansurance* 10(4), 15-24.

岡本祐子 2007 アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房

奥田紗史美・前田健一・岡本 祐子 2003 葛藤場面における他者との関わりとアイデンティティの関連 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター

Rasmussen, J. E. 1964 The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, 15, 815-825.

下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究：アイデンティティの発達との関連で 教育心理学研究, 40(2), 121-129.

園田雅代 1980 女子大学生における自我同一性研究--理論的考察と実証的検討 論叢 (21), 319-368.

園田雅代・無藤清子 2011 臨床心理学とは何だろうか 新曜社

杉村和美 1997 青年期から中年期までの現代女性のアイデンティティ発達 日本教育心理学会総会発表論文集, (39), S41.

杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9(1), 45-55.

杉村和美 1999 アイデンティティ形成における性差の諸問題(青年研究において性差はどこまで考

慮すべきなのか 日本青年心理学会大会発表論文集, (7), 12.

砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27(3), 215-220.

谷冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成 教育心理学研究 49(3), 265-273.

谷冬彦・原田新 2011 新たな親密性尺度の作成 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5 (1) ,1-7.

鐘幹八郎 他 (編) 1984 アイデンティティ研究の展望 I ナカニシヤ出版

鐘幹八郎 1990 アイデンティティの心理学 講談社現代新書

鐘幹八郎・宮下一博・谷冬彦 2014 アイデンティティ研究ハンドブック ナカニシヤ出版

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30 , 64-68

Zung WWK. 1965 A self-rating depression scale. Arch Gen Psychiatry 12, 63-70